

をはじめ、道を求めるために、仏陀と出会うために、生涯を信仰に生きた数々の事例に、あらためて驚嘆することが多い。世間的な常識でしか見ていなかったときには気付かなかった世界が、新たな姿でわたしに生きることの意味を問い直してくる。心の奥底から人を突き動かしていく信仰の目覚めの奥深さにあらためて驚愕する。

宗教研究を進めるには調査対象や資料が必要である。また、これだけ組織化と情報処理の手法が急激に進展した社会状況に対応して、宗教の組織的研究が貢献している成果にははかりしれないものがあると言つてよいであろう。しかしながら、伝統宗教に身を置く者からすると、平凡な姿で生活を営んでいて、外からは見えない彼等の内部に宿される宗教心の深層を探ることの重要性を感じる。あらためていうのもおかしいかもしれないが、現代人の宗教心情の深層を解明する宗教学の意味は重いのではないかと思うのである。



特集 宗教復興の潮流

現代世界における巡礼の興隆 ——その意味するもの——

■はじめに

二〇〇四年八月六日、AFPが伝えたところによると、記録的な数の巡礼者——総数約二一七千人——が、この年の巡礼期間中にアマルナートへの困難な巡礼を行なった。アマルナート洞窟は北インド、カシミール地方にあり、ヒンドゥー教のシヴァ神を象徴する氷のリングが祀られている。この山中の洞窟への巡礼は数日間のトレッキングの旅を要するもので、毎年七月一五日から八月末にかけて行なわれる。公式発表によると、すでに二〇〇四年の八月初めには、巡礼者が前年の一七万五千人という記録を上回り、三〇万人に到達すると予想されてい

た。この地域がインド・パキスタン紛争の中心に位置しており、近年テロ活動の被害を大きく被っているにもかかわらず、そして、前年にはムスリムの暴徒による巡礼者襲撃事件が起きていたにもかかわらず、このように大幅に巡礼者が増加したのである。

近年、巡礼者が大幅に増加した主な巡礼地は、なにもアマルナートだけではない。インドだけに限っても、最近では、二〇〇一年のクンブ・メラへの巡礼（十二年ごとにヤムナー河とガンジス河の合流点で行なわれる）が、一度に集まった人数としては世界最高であったとされており、最高時には数百万人が巡礼に加わっていたと言われる。世界各地で同じようなパターンが見られる。ほと

イアン・リーダー

んどあらゆる宗教伝統とつながりを持っている巡礼拠点があり、また、いかなる組織的宗教伝統からも独立に現代に新しく現われた巡礼拠点もある。どちらにおいても訪れる巡礼者の数は増えてきている。たとえば、ヨーロッパの有名なカトリックの巡礼地では、クロアチアのメジューゴリエから、ポルトガルのファティマ、スペインのサンチアゴ・デ・コンポステーラ、フランスのルルド、イタリアのサン・ジョヴァンニ・ロトンドに至るまで、一九九〇年代後半から今世紀にかけて、例外なく大幅な巡礼者数の増加があった。具体的には、ルルドは現在一年間に約六〇〇万人が訪れ、一方、クロアチアのメジューゴリエは、一九八一年にユーゴスラヴィアのボスニア・ヘルツェゴヴィナ地方の若者達に聖母マリアが顕現してから有名になり、東ヨーロッパ有数の巡礼拠点となっている。メジューゴリエは、ユーゴスラヴィア（当時）の政治問題が徐々に表面化し、戦争の脅威が感じられはじめた頃からにぎわいはじめた。政治問題が厄介なものとなっていたその当時に、メジューゴリエの地は、カトリックの敬虔、紛争の平和解決への熱意、そして地域のアイデ

ンティイの表現と結びついた。その結果、一九八〇年代を通じて急速に巡礼者が増加し、一九九〇年には一〇〇万人を突破した。内戦が差し迫る中、心の慰めが求められていたのである。一九九〇年代初頭、その地方は戦争状態に入って危険な情勢であり、巡礼者数は目に見えて減少した。しかし、平和がもどるにつれて巡礼者数は回復し、今年年間一〇〇万人を上回っている。さらに、メジューゴリエが旧ユーゴスラヴィアの常連巡礼者達が多数を占めるような地方的な巡礼拠点であったのは過去のことと、今や、拡大しつつある国際的巡礼者社会をひきつける巡礼地になっている。とりわけ目立つのはアメリカの団体が企画した巡礼ツアーで訪れているアメリカ人カトリック教徒である。

その他、有名なヨーロッパのカトリックの巡礼地で人気が上昇中なのは、スペインの西端部に位置するサンチアゴ・デ・コンポステーラである。この中世ヨーロッパ最大級の巡礼地では、数世紀の衰退期を経て、二〇世紀半ばから、巡礼者数が顕著に増加している。サンチアゴの最近の発展でとりわけ目を引くのは、自動車などの交

通手段を使わずに、徒歩で、あるいは馬や自転車に乗ってやって来る巡礼者が多いことである。サンチアゴ当局は、巡礼者に証明書（コンポステーラ）を発行しているが、その対象者は、サンチアゴまで徒歩か馬で少なくとも一〇〇キロ、自転車なら二〇〇キロの道のりを旅した人々である。発表によると、発行数は一九八六年には二、四九一に過ぎなかったのが、二〇〇三年には七万四、六一四に増加している。なかでも一九九九年はローマ法王によって聖年であると宣言され、カトリック教徒にとっては特に巡礼の功德が大きいと考えられたために、発行数は劇的に増加し、一五万を越えた。

アメリカにおいても、カトリックの巡礼地は人気を集めてきている。フロリダ州クリアウォーターの聖母への巡礼は一九九六年以来盛んになっているが、現代の商業ビルが聖母マリアの顕現と奇跡の地へと変容したという点で、現代社会のただ中で巡礼と奇跡がいかにして結びつくのかを示している。一九九六年一月一七日、フロリダ州クリアウォーターの商業ビルの窓に、聖母マリアの姿が浮かび上がった。このニュースが広まるにつれて

人々が集まりはじめ、二、三年後にはこの場所への訪問者は一〇〇万人を越え、クリアウォーターの聖母として有名になった。クリアウォーターについては興味深いのは、ビルディングに聖母が現われたのは物理的要因と樹木の間から差す日光など他の要因の組み合わせによる反射のためであるという容易に納得のいく説明の存在である。それでも、この広く受け入れられている合理的説明をもってしても、それが聖母マリアの顕現であり、臨在のしるしであるという訪問者の信仰は衰えることはなかった。換言すれば、現代的、合理的な現象の説明が存在しても、それは依然として、合理性を超えた神的存在の「奇跡的」顕現であり、しるしなのである。実際、奇跡的顕現の影響力は強く、もともとはある会社が所有する商業ビルであった建物が、今や礼拝のためのセンターとなり、カトリックの平信徒の信仰集団によって運営されている。そのリーダーである女性カトリック教徒、リーター・リング (Rita Ring) は、その場所ではイエス、マリア、神のメッセージを受け取ったと主張している。そのビルはマリア・イメージ・ビルディングと改称されて、平信徒が巡